

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅳ部

	名称	解説	
	Ⅳ 近世の文学		
		<p>近世は、17世紀初頭から19世紀後半までの約270年間を指します。それまでの写本の時代から刊本の時代へと移ったこと（出版文化の普及）が最大の特徴です。文学の享受層は多岐に及んで大衆化し、漢詩・和歌といった伝統的な雅文学から俳諧・小説・芸能などの俗文学に至るまで、多彩に展開しました。前期は上方中心、徐々に文運東漸して、後期は江戸が中心となりました。</p>	
	江戸前期の文学	<p>幕初から元禄あたりまで（1603 - 1704）、おおむね17世紀を「前期」と捉えます。整版本の普及によって古典が広く継承されると、今度はそこに同時代の文芸が花開きます。京・大坂などの上方を中心として公家と武家が文化を領導する一方で、徐々に町人も台頭し、元禄期（1688 - 1704）には松尾芭蕉・井原西鶴・近松門左衛門が華々しい活躍を見せました。</p>	
	漢詩・漢学	<p>儒者は、人倫道徳を重んじて現実を尊重したので、漢詩文はあくまでも余技に過ぎませんでした。他方、隠者石川丈山と日蓮宗僧侶元政は、儒学と切り離して詩文を深く修めました。貞享・元禄期（1684 - 1704）になると、京に伊藤仁斎が登場し、人情を寛容に受け止める儒学説（仁斎学・古義学）を主唱、漢学を朱子学の道学主義から解放する緒を切り開きました。</p>	
	和歌・和学	<p>細川幽齋が没すると古今伝授は御所へと入り、後水尾院・靈元院が堂上歌壇を領導、これとは別に地下歌人たちも門流ごとに勢力を拡大させます。堂上・地下を問わず、二条派風の温雅な詠風が特徴ですが、木下長嘯子など異色の歌人も現れました。出版が普及して多くの古典に流布本が備わる一方で、契沖は古典研究に文献学の方法を持ち込んで大きな成果を挙げました。</p>	
	俳諧（貞門）	<p>寛永10年（1633）に最初の俳諧撰集『犬子集』が刊行されると俳諧は一気に流行します。貞門は松永貞徳を中心とする一派の総称で、俳諧を「俳言を以て作る連歌」と規定し、言語遊戯による微温的な俳風を旨としました（おおむね中本か横本）。主要俳人は安原貞室・松江重頼ほか。談林との対立期を経て衰えますが、細々とした命脈を天保期（1830 - 44）まで保ちました。</p>	
	俳諧（談林）	<p>談林は大坂天満宮の連歌所宗匠西山宗因を中心とする一派の総称で、寛文末年（-1673）頃に誕生、俳諧を「寓言」と規定して、破調や字余り、極端な擬人法などを旨とした猥雑かつ奔放な俳風で一世を風靡しました（横本が多い）。速吟による矢数俳諧は特に有名です。主要俳人は井原西鶴・岡西惟中ほか。延宝末年（-1681）頃には衰退、流行はわずか10年ほどでした。</p>	
	俳諧（芭蕉）	<p>貞門・談林を経験した松尾芭蕉は、貞享元年（1684）、41歳で蕉風に開眼（『冬の日』）、以後は旅を続けながら句境を深めてゆきます（『笈の小文』ほか）。元禄期（1688 - 1704）には「不易流行」を提唱（『おくのほそ道』／枅型本）、俳風は一段と円熟味を増し最晩年には「軽み」を主唱しました。主要門人は向井去来・野沢凡兆ほか（蕉門の撰集はおおむね半紙本）。</p>	
	小説（仮名草子）	<p>仮名草子は、幕初から天和2年（1682）に『好色一代男』が登場するまでの間に著わされた小説・随筆類の総称（強いて言えば大本が多い）。「仮名」は漢文に対しての用語で、平易な娯楽的読み物という意味です。啓蒙教訓的なもの（『清水物語』）、翻訳もの（『伽婢子』）、擬古的なもの（『犬枕』『仁勢物語』）、軍記的なもの（『大坂物語』）等々、内容は多岐にわたります。</p>	
	小説（西鶴）	<p>井原西鶴は、天和2年（1682）に『好色一代男』を刊行してから小説を量産、当代社会の色欲や金銭、武士や庶民の精神を、即物的に話術巧みに描き出しました（おおむね大本）。他の好色物に『好色五人女』、武家物に『武家義理物語』、雑話物に『西鶴諸国はなし』、町人物に『世間胸算用』などがあり、さらに『西鶴置土産』ほか西鶴没後に弟子の北条団水が編刊したものも知られます。</p>	
	演劇（近松）	<p>古浄瑠璃の時代を経て元禄期（1688 - 1704）が近づくと、近松門左衛門が登場します。想像力溢れる時代物（『世継曾我』『国性爺合戦』）、人間の生の悲しさを情感豊かに描いた世話物（『曾根崎心中』『心中天の網島』）など、多くの浄瑠璃を遺しました。実とも虚とも言い切れない微妙な表現こそ初めて人を感動させられるという「虚実皮膜論」（『難波土産』）も有名です。</p>	
	江戸中期の文学	<p>宝永頃から天明あたりまで（1704 - 1789）、おおむね18世紀を「中期」と捉えます。宝暦・明和（1751 - 72）を境として文化の中心が上方から江戸へと移り（文運東漸）、双方の地で多様な文芸が展開しました。本居宣長・大田南畝・与謝蕪村・上田秋成など雅俗両面にわたって多士済々、近年ではこの18世紀こそ近世文化の最盛期とする見方も出されています。</p>	

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅳ部

	名称	解説	
	漢詩・漢学	正徳・享保期（1711 - 36）には、江戸に荻生徂徠が出て独自の儒学説（徂徠学）を展開、その門流（古文辞派）の中には、服部南郭など詩文を専修する詩人が輩出して、漢学の儒学からの分離が進みました。やがて江戸に山本北山が登場し、古文辞派による擬古主義を痛烈に批判、自己の真情と目前の景を率直に詠うべきだと主張して、詩壇は唐詩風から宋詩風へと転換します。	
	和歌・和学	堂上歌壇最後の領袖は冷泉為村で、江戸の武家方をはじめ各地に門人を抱えましたが、その為村に破門された小沢蘆庵は「ただこと歌」を提唱、心情を平易なことばで詠うことこそ大切だと主張しました。賀茂真淵・本居宣長が登場して国学も大きく進展、「もののあはれを知る」（『源氏物語玉の小櫛』ほか）説は、中世以来の教教的文学観から文学を解放した画期的なものでした。	
	狂詩・狂歌	狂詩は狂体の詩。狂者精神に基づいた狂文とともに宝暦・明和（1751 - 72）の頃に流行（当初は小本、のち中本）、大田南畝の『寐惚先生文集』はその代表的作品です。狂歌は狂体の和歌。爆発的に流行したのは天明狂歌（江戸狂歌）で、唐衣橋洲・大田南畝・石川雅望らが機知と滑稽を高らかに詠い上げ、多くの狂歌本が出版されました。極彩色の狂歌絵本も知られます。	
	俳諧	享保期（1716 - 36）における江戸座の組織化や美濃派の拡大を経て、徐々に芭蕉復古の機運が醸成されます。安永・天明期（1772 - 89）になると、与謝蕪村（京）・加藤暁台（名古屋）らが登場して天明俳諧（中興俳諧）が開花、文人趣味に基づいた唯美的世界を示しました。絵師でもあった蕪村は、文人画だけでなく、『奥の細道画巻（ほそみちえまき）』など俳画（はいが）にも大きな足跡を遺しました。	
	川柳	川柳は、雑俳で前句が省略されたもの。俳諧の発句と同じ「五・七・五」の十七音ですが、季語と切字が不要で、俳諧よりもいっそう大衆性が強く、人情や世相を機知的に詠います。創始者は柄井川柳。明和2年（1765）に刊行が始まった『諷風柳多留』（百六十七編）はその代表的作品です（小本）。「六歌仙 六をかけても 歌仙なり」（同書三十三編）、こんな調子です。	
	小説（浮世草子）	浮世草子は、天和2年（1682）刊の『好色一代男』以降、宝暦・明和（1751 - 72）頃までに主に上方で著わされた小説類の総称。中核は西鶴本（おおむね大本）と八文字屋本（横本の帳綴じ本〈横綴じ半紙本とも〉など）で、主要作家は井原西鶴・江島其磧・多田南嶺ほか。『雨月物語』発表以前の上田秋成（和訳太郎）『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』も浮世草子に数えられます	
	小説（前期読本）	読本は、寛延（1748 - 51）頃から幕末にかけて、中国白話小説を翻案して趣向とし、勧善懲悪・因果応報の内容を雅俗折衷の和漢混雑文で綴った小説群のこと。「初期読本」（前期読本・上方読本）と「後期読本」（江戸読本）に分けられます。初期読本の嚆矢は寛延2年（1749）刊の都賀庭鐘『英草紙』、代表作は上田秋成の『雨月物語』です（基本型は半紙本5冊）。	
	小説（談義本）	談義本は、宝暦に始まる半紙本仕立ての読み物（3冊から5冊）。淵源は正徳・享保期（1711 - 36）の増穂残口や佚斎樗山の教訓色の濃い作品群で、諷諷を主に当世の風俗を滑稽な表現によって描きました。旧来の文学史では「滑稽本（こっけいぼん）」に括（く）られていましたが、近年は「談義本」の名称が確立、平賀源内（ひらがげんない）の『根南志（ねなし）具佐（ぐさ）』などが代表作です。	
	小説（黄表紙）	黄表紙は、草双紙（絵の余白に文章を書き入れて5丁を1冊とし、江戸で刊行された中本型の読み物）の一形態。幼童向けの赤本・黒本青本とは異なり、「うがち」による知的描写を備えた知識層向けです。嚆矢は、安永年（1775）刊の恋川春町作『金々先生栄花夢』。天明期（1781 - 89）に黄金時代を迎えました。山東京伝の『江戸生艶気権焼』（天明5年刊）などが高名です。	
	小説（洒落本）	洒落本は、滑稽をねらった「うがち」によって遊里の当世風俗を活写したもの（基本型は小本1冊。蒟蒻本とも）。享保末（- 1736）から天保・弘化（1830 - 48）までを範囲とし、特に安永・天明期（1772 - 89）に最盛期を迎えました。明和7年（1770）刊の『遊子方言』でその様式が確立、第一人者は山東京伝で、『通言総籙』『傾城買四十八手』などが知られます。	
	演劇（浄瑠璃）	大坂道頓堀の竹本座と豊竹座が競い合って作品を発表し、人形浄瑠璃は最盛期を迎えます（正本〈浄瑠璃の刊本〉はおおむね半紙本）。この頃、複数の作者による分担執筆が一般化、『菅原伝授手習鑑』は竹田出雲・並木宗輔ら4人の合作、『義経千本桜』と『仮名手本忠臣蔵』は竹田出雲（二世）ら3人の合作です。近松半二)以降衰退しますが、今でも文楽の名で生き残っています。	

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅳ部

名称	解説
江戸後期の文学	寛政頃から慶応末まで（1789－1868）、おおむね19世紀を「後期」と捉えます。中心は江戸へと移り、十返舎一九や曲亭馬琴ら職業作家も出現、地方にも良寛（越後新潟）、橋曙覧（越前福井）、小林一茶（信濃）など、種々の個性的な作家が登場しました。ピークの文化・文政期（1804－30）には、他に香川景樹・式亭三馬・鶴屋南北（四世）らが活躍します。
漢詩・漢学	備後神辺の菅茶山は日常的な詩情を重視して清新な詩風を示し、他方、市河寛斎を盟主とする江湖詩社からは、やはり宋詩風を重んじた大窪詩仏や柏木如亭が現れて化政期（1804－30）詩壇を牽引しました。詠史詩に特徴を見せた頼山陽や、江馬細香ら女流も出現、三都を中心に地方にも高名な詩人が輩出して漢詩は隆盛を極め、この傾向は明治の半ばあたりまで続きました。
和歌・和学	小沢蘆庵に私淑した香川景樹が「しらべの説」を主唱して和歌の革新を進め、桂園派は全国を席捲します。その流れは幕末の八田知紀を経て高崎正風へと継承され、明治の御歌所へと展開しました。そうした全国的な動きとは別に、良寛（越後新潟）や橋曙覧（越前福井）・大隈言道（筑前福岡）らの地方歌人、野村望東尼・大田垣蓮月などの女流歌人も独自の地歩を築きました。
俳諧	寛政4年（1792）の芭蕉百回忌を機に芭蕉の神格化が進み、俳諧は一気に大衆化・低俗化に向かいます。天保俳諧の中心には成田蒼虬や桜井梅室がいましたが、他方、農村出身の小林一茶（信濃）は独自の作品を遺し、その人間味溢れる生活詩は異彩を放ちました。月並俳諧は隆盛を極めましたが、それはやがて明治に至って正岡子規から月並調として激しく批判されました。
小説（後期読本）	後期読本の典型は浪漫的長編小説で、主要作家は山東京伝（『桜姫全伝曙草紙』『昔話稲妻表紙』）と曲亭馬琴（『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』）です。特に馬琴は、中国長編小説に影響を受け壮大な構成力に優れました。後期読本の大半は稗史物（半紙本）ですが、図会物（『源平盛衰図会』／大本）や絵本物（『絵本忠臣蔵』）、中本物（『翁丸物語』）も出版されました。
小説（滑稽本）	滑稽本は、庶民生活の中の大衆的な笑いを描いた中本型の小説類のこと。嚆矢は、享和2年（1802）に刊行された十返舎一九の『東海道中膝栗毛』初編で、化政期（1804－30）を頂点とします。『膝栗毛』とともに、式亭三馬の『浮世風呂』四編（文化6年－同10年刊）が高名です。会話体を効果的に利用して、寛政の改革以前とは異質の、新しい〈笑い〉をもたらしました。
小説（人情本）	人情本は、女性を対象に、会話を多用しつつ芝居や恋愛を描いた中本型の風俗小説のこと。嚆矢は、文政2年（1819）に刊行された十返舎一九『清談峰初花』と滝亭鯉丈『明烏後正夢』で、天保期（1830－44）にピークを迎え、明治初期まで続きました。主要作家は、人情本の元祖を自認した為永春水、『春色梅児誉美』四編（天保3－4年刊）はその代表作です。
小説（合巻）	合巻は、黄表紙のあとを承けて文化4年（1807）以降に刊行された草双紙の総称（やはり中本型で5丁を1巻とし、数巻をまとめて1冊とする）。伝奇色と娯楽色の濃い長編です。文政・天保期（1818－44）にピークを迎え、明治初期まで続きました。代表作は、柳亭種彦作『修紫田舎源氏』三十八編（文政12年－天保13年刊）。他に、柳下亭種員ら作『白縫譚』など。
演劇（歌舞伎）	化政期（1804－30）には鶴屋南北（四世）が登場、「生世話」（写実的な演出）というジャンルを確立させます。代表作は『東海道四谷怪談』（文政8年〈1825〉初演）、お岩の髪梳きの場面など、悲惨さを効果的に演出しました。展示本は、筋書きを挿絵入りで紹介した正本写し合巻の『東街道中門出魁 四ツ家怪談』（文政9年刊、初印本の外題は「名残花四家怪譚」）。